

文化芸術交流

◎ Arts and Cultural Exchange



日本文化を世界へ向けて発信!

文化人や芸術家にとどまらない市民レベルをも含めた人物交流に加え造形美術、舞台芸術、映像メディア、出版等広い分野において日本文化を世界中に紹介しています。文化の担い手の多様化を反映したその活動は伝統芸術から現代アートまで実に多岐にわたり国境を越えた深い文化理解や真の国際交流として結実しています。

舞台芸術は子どもたちに何ができるのか

沖縄市で開催された「2007 国際児童・青少年演劇フェスティバルおきなわ(キジムナーフェスタ)」にて、ジャパンファウンデーションは同フェスティバル実行委員会とともに、海外の児童青少年演劇専門家を招へいし、国際シンポジウムを開催しました(7月27日、28日)。

国際シンポジウムⅠ「児童青少年演劇と教育～子どもたちに演劇との出会いを」では、ドイツ、イギリス、ロシア、アメリカ、韓国からパネリストを招き、貧困・暴力・家庭崩壊等さまざまな課題に直面している現代社会において、子どもたちが演劇と出会う意味は何かを議論しました。

また国際シンポジウムⅡ「紛争地域の子どもたち～児童演劇はどんな仕事をしているか」では、北アイルランド、クロアチア、パレスチナ、ヨルダン、イラク、ザンビアといった、世界の紛争地域で子どものための舞台芸術活動をくりひろげているアーティストをパネリストに迎え、舞台芸術は子どもたちに何ができるのか、平和な世界を取り戻すための力があるのかを議論しました。

双方のシンポジウムとも会場が一杯になる盛況ぶりでしたが、特に紛争地域を扱ったシンポジウムⅡは複数のメディアに取り上げられ、高い関心を集めました。また、シンポジウムⅡの内容は、ジャパンファウンデーションの隔月刊誌『をちこち』第20号(2007年12月)でも報告しました。



中東のデジタルアニメ人材育成のための専門家派遣

日本紹介のための専門家派遣事業

技術・表現・ビジネス面と、総合的にアニメ制作を指導

2008年1月から2月にかけて、日本が誇る若手アニメ監督・新海誠氏、株式会社コミックス・ウェーブ・フィルム代表取締役の川口典孝氏、同取締役・プロデューサーの角南一城氏によるアニメ制作ワークショップを、ヨルダン、カタル、シリアの3カ国において実施しました。アニメーターを目指す中東の若者たち各10～25名を対象に、1カ国あたり1～2週間に亘り、絵コンテ、背景美術、コンポジット等のアニメ制作過程を技術面と表現面の双方から、また現地プロデューサー向けにはビジネス面まで含めて教授する企画です。ワークショップを通じて、アニメ制作者になる夢を抱く中東の青年たちは、憧れの日本人アニメ監督の指導の下、それぞれにオリジナル・ストーリーを考え、現地ロケハンにより普段見慣れたシーンを背景に仕立て、そこに動画を組み合わせ、1分程度のビデオ・コンテを作る試みに挑戦しました。また、広く一般向けに、また学生・児童向けに各地で同時開催した講演会やアニメ上映会も毎回大好評を博し、かつてジャパンファウンデーションの支援を受けて日本語を学んだ現地研究者たちがチームを組んで今回新たにアラビア語字幕を付けた新海作品は、中東の人々に熱狂的に迎えられました。

中東にクリエイターの卵が誕生 日本への信頼度アップにつながる事業に

多くの国で人口の半数以上が20歳以下という中東はポップ・カルチャーの一大市場で、単に鑑賞するのみでは飽き足らず、自ら表現するクリエイターになりたいという若者も出てきています。また、いずれの国でも青少年は日本のアニメに夢中で、それが日本への親近感や信頼感の醸成にも繋がっているともいえます。そうした状況の中で依然生まれ出てこない中東独自の作品を制作できる人材を育て、現地のデジタル・コンテンツ産業を芸術面と技術面の双方から支援するため、現在世界が認めている日本の優れたアニメ制作力を最大限活かし、文化における日本－中東協力を試みたのが本事業です。発案者の在ヨルダン日本大使館ほか各国日本大使館、現地の映画協会やIT専門学校、大学等の協力を得、より効率的・効果的に、日本の持つアニメ制作の高い技術を伝達し、日本的な表現方法や日本ならではのアニメ制作方法を紹介することを目指しました。参加者からは、「新海監督の美しく切なく懐かしい作風と、最先端

技術を駆使する技法のギャップに感動した」、「監督、プロデューサーたちの穏やかで若々しく真摯な人柄にも大いに魅了された」、「非常に若くして、ごく限られた少人数ですばらしい作品を制作し、あっという間に世界に名を馳せた新海監督とそれを支えるやはり若いプロデューサーの姿は、自分の目標として大いに刺激となった」といった感想を得ました。

ポップ・カルチャーの創造を支援

中東のような地域に対するポップ・カルチャー紹介はさほど容易でなく、適切に文化を翻訳あるいは解説できる人物が必要な場合が多々あります。まとまった日数を日本人監督らとともに過ごし、さまざまなことを語り合えた今回のワークショップは、アニメ制作者のみならず、こうした文化交流の媒介者の育成上、意義のある事業となりました。

海外から日本に対して寄せられる漫画・アニメ等ポップ・カルチャー関係事業のニーズは高く、ジャパンファウンデーションは2007年度、ロシア、スペイン、アラブ首長国連邦等に専門家を派遣し、ワークショップ等を開催。書物やTVだけでは伝わらない漫画・アニメの文化的背景や歴史を海外へ伝えています。

参考：『をちこち』23号に川口典孝氏、角南一城氏による報告『予想を超えたアニメへの情熱』が掲載されています。



ヨルダンにおけるワークショップ。新海監督は参加者一人一人のものを回って、背景美術の制作方法を手ずから説明した©山下ススム



カタル大学でアニメーション制作について解説する新海監督。講義後も学生に囲まれて多くの質問を受けた©角南一城

ケニアの漫画家ムワムペムブワ氏を招へい 海外の文化人招へい事業

アフリカで300万名を超える読者を持つ「ネーション」紙はじめ世界の紙誌上で歯に衣着せぬ政治批評を繰り広げるケニアの一コマ風刺漫画家、ゴドフリー・ムワムペムブワ(ガド)氏が、8月、ジャパンファウンデーションの招へいにより初めて来日しました。日本では、漫画・アニメ制作に関する情報収集に励み、漫画家を志す若者たちと語り合い、寺社、学校、武道場、芸能舞台、繁華街、市場、工場等を精力的に巡って、日本のさまざまな姿を見聞し、「多様な文化と豊かな歴史、そして漫画やアニメが持つ『日本』を表現する力に衝撃を受けた」といいます。加えて、15日間の日本滞在の最後に行った講演会では、報道の自由が制限されている中、アフリカの民主化の過程で漫画はどのような役割を果たしてきたか、自身の作品を紹介しながら解説し、聴衆との懇親を深めました。また、ケニア帰国後の2月にはナイロビにおいて新作11点を集めた「ガドの見た日本」展が開催され、ガド氏のトークに900名以上のケニアの若者たちが熱心に耳を傾けました。

ガド氏は、漫画という手法によりアフリカ内部の問題に世界の目を惹くことで、笑いを通じてアフリカと国際社会とを

繋いでいます。そのガド氏が最もショックだったのは、日本人がアフリカを知らないこと。今回の日本滞在経験を生かして「動物や貧困だけではなくアフリカを世界に知ってもらうため、アフリカを舞台にした政治コミックを描きたい。日本の協力を得ながら故郷の伝説を元にアニメも作りたい」という夢を温め続けています。



漫画家ゴドフリー・ムワムペムブワ氏



青少年問題関係者グループを韓国に派遣

日韓両国が共有する社会的課題を中心としたNPO／市民団体間の交流強化を目指して2006年度に韓国の青少年教育関係者のグループを招へいしましたが、そのさらなる展開を目的として、2008年3月3日～8日の間、日本から6名の若者自立支援NPO実務者を韓国(ソウル)に派遣しました。

現地では、現場視察や意見交換に加え、日韓市民団体関係者約70名を対象に、経済学者ウ・ソクフン氏(韓国ベストセラー『88万ウォン世代』著者)による講演会、日本側参加者による活動紹介プレゼンテーションを実施し、さらに3つのテーマに分かれた分科会(参加人数:各15～20名)等も開催することにより、相互理解を促進し、日韓文化交流5カ年計画の事業「日韓両国のNPO交流強化」の達成に寄与し、大いに成果をあげました。

また、各種マスコミにも取り上げられ、日本と韓国のNPO／市民団体を主体とした特色ある交流の一例として大いに注目されました。

事業実施後、基金主催、派遣者主催の報告会をそれぞれ実施しました。



白手(=ニート)放送局ラジオ番組出演



ソウル市内青少年職業体験センター(ハジャセンター)訪問

美麗新世界:当代日本視覚文化 海外展:中国

2007「日中文化・スポーツ交流年」を記念して開催された「美麗新世界：当代日本視覚文化」展では、現代美術から、メディアアート、建築、ファッション、漫画やアニメーション等のポピュラーカルチャーまで、34名のクリエイターの代表作を紹介しました。全体を「美しきリアルワールド」、「ニューメディアワールド」、「世界の終焉と未来世界」の3つのセクションに分け、「美しさ」や「新世界」という言葉から多層的に広がる表現を通じて、日本の現代社会を多角的に検証する内容で、798大山子芸術区の3会場(北京)と、広東美術館(広州)で実施され、それぞれ23日間の会期で計7万名の入場者がありました。また北京では現在の日本社会への理解を目的に、若い層をターゲットに中央美術学院でシンポジウムを、広州では子どもたちへの教育プログラムやワークショップをあわせて実施しました。

本展は、中国において網羅的に最新の日本現代美術を見せるはじめての機会となっており、美術関係者に高い評価を受けました。また、日本のサブカルチャーに親しんで育った10代から20代初めのネット世代の若者層にとっては、身近

展覧会カタログ



に日本文化に接する絶好の機会となりました。

広州・広東美術館での展示風景



第52回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展 日本館出展 国際美術展への参加

1895年の創設以来100年以上の歴史を持ち、世界各地で行われている国際美術展の元祖と言われる本展が、2007年6月10日から11月21日まで開催されました。総合ディレクターによる企画展、国別参加展等さまざまな催しがヴェネチアの島中で繰り広げられました。

ジャパンファウンデーションは、1976年から日本を代表して日本館の展示を実施しています。コミッショナー・港千尋氏(多摩美術大学教授)とアーティスト・岡部昌生氏(札幌大谷大学教授)が「私たちの過去に、未来はあるのかーThe Dark Face of the Light」をテーマに、フロッターージュ(擦り取り)作品を中心に全壁面を約1,100点で覆い尽くし、床には旧国鉄駅のプラットホームの縁石を配置しました。20万名を超える入場者があり、港氏は「フロッターージュの対象である字品は、かつて広島軍港駅で、日清戦争以降太平洋戦争終結まで、おびただしい量の物資と人間がアジアへ運ばれた場所であると同時に、原爆の被災地でもある。岡部はこの駅のプラットホームの縁石を擦り続け総数4,000点におよぶ記録を残した。(中略)そこには過去とどう向きあうか探している現代の人間にとって、何らかのヒントがある



日本館でフロッターージュを体験する来館者



記者発表の様子。
左:港千尋氏、右:
岡部昌生氏

ようにも思われる」と述べていますが、来館者からは、powerful、peaceful、thank you等の声が聞かれました。

ヴェネチアではフロッターージュやワークショップも行い、加えて、ローマ日本文化会館でも展覧会を開催、アートで町と人を結ぶ活動がさらに広がりました。

消失点—日本の現代美術 海外展:インド

2007年日印交流年を記念して、(1)ニューデリー国立近代美術館での展覧会、(2)インド各地での滞在制作、(3)ムンバイの民間ギャラリーでの成果発表・展覧会という3つの要素から構成される美術交流事業を実施しました。ニューデリーでは、線遠近法でイメージを可視化するために用いられてきた「消失点」をモチーフに、視覚表現に取り組む10名の作家たちの活動を紹介する展覧会を開催。ほぼ同時期に、インドのNPO、大学、作家たちの協力を得て、4組5名の日本人作家をニューデリー、ムンバイ、アーメダバード、シャンティニケタンに派遣しました。そして、作家たちがインドの人々と交流しながら各々のテーマを充実させ、現地制作した作品と、ニューデリー展参加作家の一部の作品から構成される成果発表の展覧会を、ムンバイのプロジェクト88、チャッタージー&ラール・ギャラリーで開催しました。今後の日印間の文化的対話に弾みをつけた展覧会となりました。

キュレーター：金井直（信州大学准教授）

出品作家：平川典俊、石原友明、木村崇人、小金沢健人、三輪美津子、村岡三郎、村瀬恭子、中川幸夫、ノーヴァヤ・リュストラ（中野良寿、安原雅之）、祐成政徳、田中敦子、山口啓介、寄神くり（アルファベット順）



『Invention and Sinfonia,BA』
ニューデリー国立近代美術館エントランスホール©祐成行徳

『演じる女たち—ギリシャ悲劇からの断章』3部作 国際舞台芸術共同制作

90年代からアジア各国と続けてきた共同制作は、戦略的に地域を移し、その都度方法論を大胆に変えることで、世界を認識する手段として演劇に何ができるかを問い続けてきました。今回はインド、イラン、ウズベキスタン、日本の共同作業で、3名の演出家と、ギリシャ悲劇の女性を題材に現代を照射することをテーマに作業しました。1部はウズベキスタンのオブリアクリ・ホジャクリ氏演出で、夫の裏切りへの復讐に我が子を殺したメデアの行為を社会秩序に対する異議として描いた「メデア」、2部はイランのモハメド・アゲバティ氏の演出で、息子イオカステと交わったイオカステの行為を運命（神の意思）に抗う意識的な選択と解釈した「イオカステ」、3部はインドのアビラシュ・ピライ氏の演出で、トロイア戦争を石油をめぐる現代のポリティクスと重ね合わせて描いた「ヘレネ」。日本からは、舞台美術に現代アートの中山ダイスケ氏、作曲・演奏に国広和毅氏等が参加。1年半の制作期間を経て、完成作品は2007年1月にインドのニューデリー（第9回ナショナル・シアター・フェスティバル）、10月に東京（Bunkamuraシアターコクーン）とソウル（第7回ソウル・パフォーマンス・フェスティバル）で



第1部「メデア」



第2部「イオカステ」



第3部「ヘレネ」©古屋均(3枚とも)

上演されました。各パートは参加国でも上演され、今後も海外の国際演劇祭で上演予定です。

江戸糸操り人形「結城座」公演 海外公演

「日伯交流年（日本人ブラジル移住100周年）」の開幕を飾る大型事業として、2008年2月10日～3月2日、約370年の歴史を持つ江戸糸操り人形劇団「結城座」によるブラジル国内4都市（サントス、リオデジャネイロ、ブラジリア、サンパウロ）ツアーを行いました。

全9回の公演では、古典作品『綱鑑』と『新版歌祭文 野崎村の段』を上演。現地の専門家やサンパウロ日本人学校の小・中学生を対象としたワークショップ（全4回）も実施しました。公演チケットが早々に完売となる中で、劇場に鑑賞を求める人が殺到し、長蛇の列を作るほどの盛況ぶりでした。

冒頭に人形解説を導入したり、通常は下ろしたままの幕

を上げて人形遣いが足場の上から人形を巧みに操る様子を公開したりすると、海外公演ならではの演出も観客の好評を博し、現地のTV・新聞等に取り上げられました。



© 楳佐古晶章(上・下とも)

第1回国際漫画賞 受賞者の招へい

海外で漫画文化の普及活動に貢献する漫画作家を顕彰するため、2007年5月に国際漫画賞が創設されました。ジャパンファウンデーションは2007年7月1日から10日まで、第1回国際漫画賞(最優秀作品)の受賞者である李志清氏(香港)と、第1回国際漫画賞奨励賞の受賞者であるマデリン・ロスカ氏(オーストラリア)、ベン氏(マレーシア)、カイ氏(香港)を日本に招へいしました。

4名の受賞者は7月2日に行われた授賞式で、グラフィックデザイナー・佐藤卓氏が手がけた、漫画の吹き出しの形をしたトロフィを授与されました。その後も東京と京都で、出版社や美術館、アニメの制作会社や漫画家のスタジオ等

を訪問し、日本の漫画やアニメに関する視察や懇談を行いました。『をちこち』19号に報告が掲載されています。



マンガ学部を日本で初めて創設した京都精華大学を訪問

韓国における 第1回 国際交流基金 ポラナビ著作／翻訳賞 出版分野の支援

韓国の一般市民が日本の文化と社会に対する理解を深めるのに役立つ良著の普及を促進するため、ジャパンファウンデーションでは「国際交流基金ポラナビ著作／翻訳賞」を創設しました。この賞は、今後一層の活躍が期待される韓国の優れた若手・中堅の作家および翻訳者等を顕彰することを目的としており、その第1回授賞式を2007年3月5日ソウル日本文化センターにて行いました。初年度は、「エッセイ・評論・伝記等」の分野における著作の中から、キム・ジュニャン氏とその作品『イメージの帝国：日本列島上のアニメーション』（ハンナレ出版社、2006年）が受賞しました。日本のアニメーションの分析・批評を通じ、日本社会および日本近代史において日本のアニメーションが持つ意味を

※ポラナビとは、ジャパンファウンデーションのシンボルマークである「紫の蝶」を表す韓国語です。

第1回ポラナビ賞
受賞作品



第1回ポラナビ賞授賞式

考察した作品です。今後も「小説(韓国語訳)」、「学術書(著作)」、「ノンフィクション(韓国語訳)」の順に分野を設定し、2010年度まで毎年実施する予定です。